

海外レポート

イタリア保育

おもいきって

参観記 (3)

未就園児と家族の集う「ルドテカ」

トスカーナ州フィレンツェ市

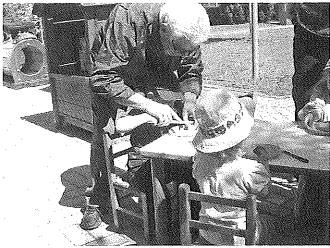
金澤妙子

(大学教員)

勤務先の海外長期研修制度で、

私はイタリア・エミリアローマーニャ州リミニ市に、二〇一二年四月から一年間滞在した。その七年前に五か月間の短期海外研修を同州ボローニャ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけである。

今号は滞在地リミニ市を離れ、トスカーナ州フィレンツェ市からのレポート。対象もLUDOTECAという未就園児施設である。



▲初回参観〈料理で遊ぶ〉の一コマ



悲しいくらい

二〇一二年四月、到着早々私はボローニャ市を訪ねた。前回研修当時の責任者は定年退職していたが、実務担当の秘書は、変わらず資料作成に携わっていて、新たな資料を用意して待っていてくれた。

もうかなり以前からイタリアも日本と全く同じ少子高齢化。何気なく言った「イタリアでは子どもは増えたか」という話題に、「移民が増えて数の上で一時期子どもの数が増えたことがあっても、イタリア人の子どもの数は増えていない。経済状況もヨーロッパ全体が悪い。今のイタリアで三人子どもを持つ勇氣

のある人はいないわね!」。彼女自身も協力者として名を連ねるポローニャ市及びエミリアロマーニャ州の「子どもと両親のためのセンター」の資料などを差し出しながら、「南イタリアには仕事がなく、北に働きに来ている人も多い。経済格差も大きいので、ひとくくりに『イタリアでは』という言い方はできないが」と前置きして、話は続いた。

「イタリアではパートタイムの仕事を探すのは難しい。働くということはフルタイムで働くことを意味する。今は経済的な理由だけでなく社会で働き続けたい女性が多い。一方、核家族が増え、地域のつながりも希薄だ。その中で子育てをする親は孤独を感じている、これをどのようにサポートしていくか、親同士のつながりをどうつけていくか……」。そんな話に及んだ時には、もうメモをとる必要はなかった。こんなことが同じでどうする!? そんな気持ちだった。小さな町で、道を尋ねた母親は、私が日本人だとわかると、「日本でも女性は、子どもは一人しかいないの?」と聞いてきた。私は「そうよ。イタリアの

ママと同じよ」と答えた。

ルドテカは LUDDOTECA

この国のこうした状況へのサポートはどうなっているのだろうか。前回研修時、ポローニャ市では、待機児解消と仕事を持つ母親支援の一策として、子どもを数人ずつ集め、そのうちの誰かの家で市の認可保育を行う piccolo gruppo (小さいグループの意) に着手したばかりであった。

本稿は場所をフィレンツェに移し、二〇一二年九月まで利用者であった日本人の母親Mさんの体験談と、この一年の研修期間にMさん母子に同行したりしながら定期的に訪問し観察したこと、担当者や利用者に向ったことを踏まえて、ルドテカを紹介する。

ルドテカには、〇〜三歳までの子どもが保護者同伴でやって来る。開園時間は月〜金曜日の九時三〇分〜十二時三〇分。大人と子どもで園内の玩具・遊具で遊んだり、施設のスタッフが提案する活動に自由に参加して過ごす。親同士の交流の場でもある。

希望者は入会登録が必要（費用は無料）。

施設の担当者シモネッタさんは、勤務先の協同組合コペラが、老人や障害者のサポートをしている関係で、小学校での障害児の補助などをはじめ、さまざまな職種に携わってきた。初めて訪れた時、ほかに大学で学んでいるという男性がいた。日本の学生アルバイトとは違う、しつかりした社会人という印象の方で年齢も二十代という感じではない。この施設は、午前中は乳幼児の部、午後四時半以降は学童保育の部に幼児から十四歳までが来る。それも担当している。

お茶の時間

私は、始発電車でも出て十時ごろにしか着かない。着くとシモネッタさんはいつも大きな容器いっぱいのコーヒーを大人用に、子ども用にはお茶を沸かしている。「朝食（おやつ）にしましょう」と三部屋に散っているみんなに声を掛けて歩くと、五畳ほどの台所は子どもと保護者でいっぱいになる。朝食をとる習慣があまりないので、本当に「朝食」になる

子もいる。保護者がパンを持参している子もいる。ビスケットやクラッカーを差し入れる保護者の姿もよく見かけた。Mさんはこのコーヒーが楽しみだったという。「朝、あたふたと支度をして子どもとここに来て、このコーヒーでほっと人心地が付くひとときが貴重だった。あそこに行けばコーヒーが飲めると思つて来た。知らない土地、しかも外国での子育て、ここがなければどうなっていたことか」と話す。

提案活動構成の視点

お茶の後片付けが済むと、保育者が活動を提案する時間だ。何をするかを示す予定表は、毎月張り替えられている。曜日によって活動内容は違う。○月、月曜日は（絵本の部屋）、火曜日は（歌遊び）というように日替わりで設定される活動と自由遊びが組み合わされている。週の半ばの水曜日は自由遊びだけで何の提案もないのが、どの月にも共通している。季節や行事も取り入れるので同じ曜日でも日によって違う。シモネッタさんは、手を使う、目で見ると

耳で聞くというのを全部入れて一週間のプログラムを作りた、コンスタントに来てるとそれら全部を経験できるようにしたいと考えていた。利用規則に「なるべく規則的に通うことが望ましい」とあるのはこんな思いからなのかもしれない。

初めて訪れた日は金曜日。この日の活動は、〈料理で遊ぶ〉。庭にテーブルを出し、ピワ、リング、サクランボを切り、食べる。子どもが小さいのでほとんど保護者が手を出しやってしまう姿と、それを振り払って自分でやろうとする子どもの姿があった。

〈絵本の部屋〉の日、シモネッタさんはマットやお年寄り用に椅子を出して準備する。そして開始を知らせるとみんな早速集まってきた本を手取る。それをシモネッタさんは壁に寄りかかってじっと見ている。本は市立図書館で借りてくる。ストーリーよりも、月の行事、食べる、感じる、色を念頭に入れて選んでいると話す。提案活動が終わり、「また明日」と帰っていくママは看護師で、今日は夜勤なので子どもとここに来たが、明日、子どもはおばあさ

んと来る。明日の活動を確認して帰っていった。

利用者の声

利用者へのインタビューも許されたので、どう思うか、もつとこうしてほしい点、ここがなければどうかなどを聞いてみた。皆、特に不満もなくここが気に入っていた。ここがなければ公園に行っていると思うが、冬が困るという声が共通していた。午前と乳児と、午後に小学生の孫と来るというおばあさん。別の所に行っていたがそのスタッフは居るだけで何もしない、こっちのほうがいいわという人。スタッフが素晴らしい、いい距離にいるという人。毎日来るというベビーシッターは、「全部かなっている」と言う。若々しくいられる。自分にとっていい所だと答えた人もいた。子どもだけでなく、自分たちの社会性の育ちにもここが必要だというおじいさんの答えに、私はうなづいてしまった。

以上は訪問初日の声だが、続けて聞いていくと、家族的だから好きだというおじいさんは、ここに来

れば公園とは違って深くコミュニケーションができると話す。社会全体が疎遠になっていられると言われる一方、その構成員一人ひとりとは他者とのかわりを求めているという気がした。

突然の危機

本誌編集発行人浜口順子さんと、夏休みに入る前に学童保育の時間帯に訪問すると、なぜか閉まっていた。開いていることは前もって確認したのでどうしたのだろうと思いつつも、予告なしにこんなことがよくある国、バカンスに行く人が多くて、開く必要がなくなって早めに閉めたのかもしれないなどと言いつつ、はるばるここまで足を運んだ浜口さん、Mさん母子と共に施設を後にした。だが、夏休み明けの九月半ば、Mさんからこんなメールが届いた。

用件 緊急連絡

14日にルド テカに行ってきました。実は市の財政難で七月の上旬から閉園したままであることをその日に知りました。先生方と個人的な連絡ができないので、

詳細はわかりませんが、今のところいつ再開するかは未定ということです。誰にでも自慢できるルド テカ。早い解決を祈るばかりです。

再開と不安、不満、怒り

再開は難しいと思ったが、朗報は意外に早かった。
用件 ルド テカ、再開のお知らせ

いつ再開するかわからないとされていたルド テカが来週から再開するという電話をいただきました。先生も従来と同じで、ホッとしています。やはり、これからの季節には、子育てが孤独にならないためにも必要ですから。本当に良かったと思っています。

すぐに出かけてみると、十二組ほどの大人と子どもがいた。男性保育者はいない。保護者は、ここに至るまでや、財政難による市のこの対応への不満、今後のことを話題にしていた。何よりシモネッタさんは怒っていた。そして、「一人なので、せっかく来てくれても活動の提案ができないわ」と残念そうだ。「自分たちの組合が市の公募に通れば資金も出て、

人が来てくれる。そうするとおもしろいことができる。この年齢の子どもは五感に訴えることができるから、ただ鍵を開けているだけではだめだ」と、活動へのこだわりは強かった。

母親にも聞いてみると、みんな活動は好きなのであった。Mさんも、活動があると親子共にリズムができるという。三十キロくらいのセモリナ粉を子どもの前に置いて、シモネッタさんは何もしないで見ている。子どもに任せる人、早く行ってごらんとか、触ってみると促す大人や近寄る子どもなど、ほかの親と子どもの距離やかかわりを見ることができた、と活動を支持する。活動にこだわらない私も、それは確かに家庭ではできない経験だろうと思った。

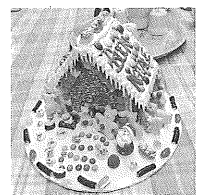
シモネッタさんがこの仕事をするきっかけは、「午前で終わるから」。まだ母親を必要とする娘さんのためだ。閉園しても、勤務先の別の部署に変わるが失職するわけではない。だが、「この地区で自分たちの協同組合が初めてルド テカを開いた。その最初からかかわってきたのよ。情熱がなければこの仕事は

できないわ」とも言う。現実的な選択なのに、実際の仕事ぶりは熱い。

かつての同僚と共に

十二月に行くと、新しいスタッフがいた。かつてここで一緒に働いていた人だという。公募の結果はまだ出ていないが、勤務先に人を要求して、何とか二人は一緒に働いてもらえるようになったようで、二人は学童保育で使用するスペースに、クリスマスマスのオーナメント作りの場を設定していた。二人で大きな机を運ぶ姿を見ると、活動の実現は一人では無理という主張はわかるような気がした。

年明け初訪問は二月のある金曜日、〈手を使う活動〉。口に入れるものは保健所の規制で難しくなっていると聞いた。部屋が狭いので入れられない、廊下で見ると言う、粉が飛ぶので戸も閉めると言う。外から窓越しに見ると言う私の提案も、大人の気が散ると却下されてしまった。説明を聞きながら、思いが噴き出している感じがした。―次号はパドヴァから―



▲クリスマスの筆者の差し入れ(大家さんお手製のお菓子の家)